

河原田遺跡発掘調査の記録Ⅲ

栗 原 将 人

1. はじめに

これまでの経緯 筆者は『愛知大学総合郷土研究所紀要』の前々輯ならびに前輯において、1965年（昭和40年）に愛知大学が実施した豊川市河原田遺跡の発掘調査の概要を報告した（栗原2013・2014、以下「前二稿」と呼ぶ）⁽¹⁾。前二稿では、発掘工程などを報告するとともに、当時の調査で遺構が検出された土器棺墓を中心に遺構及び出土遺物の事実記載を行なった。これにより、調査当時に土器棺と認定された全ての個体の状況を明らかにすることができた。

本稿の目的 しかし、河原田遺跡の概要を把握するためには、土器棺（墓）だけでは、まだ資料が十分であるとは言えない。発掘調査では、土器棺墓以外の遺構は検出されなかったものの、出土遺物の中には完形に近い個体も含まれており、余の遺構があった可能性が示唆される。そこで、本稿では、土器棺以外の出土遺物のうち、重要と思われる資料を精選して報告し、同遺跡の様相をいささかなりとも詳らかにすることで、その欠を補いたい。

記述の方針 河原田遺跡は、弥生時代を中心とした古代～中世の遺物も出土する複合遺跡であるが、土器棺以外の出土遺物は、出土した遺構や出土状態が不明瞭である（出土したトレンチやグリッド等が判明するものもある）。したがって、以下においては、弥生時代

の「前期後葉～前期末」「中期前葉」「中期中葉」「中期後葉～中期末」といった大別時期ごとに記述を進める。遺物の特徴からある程度時期が絞り込める場合はそれも記述する。

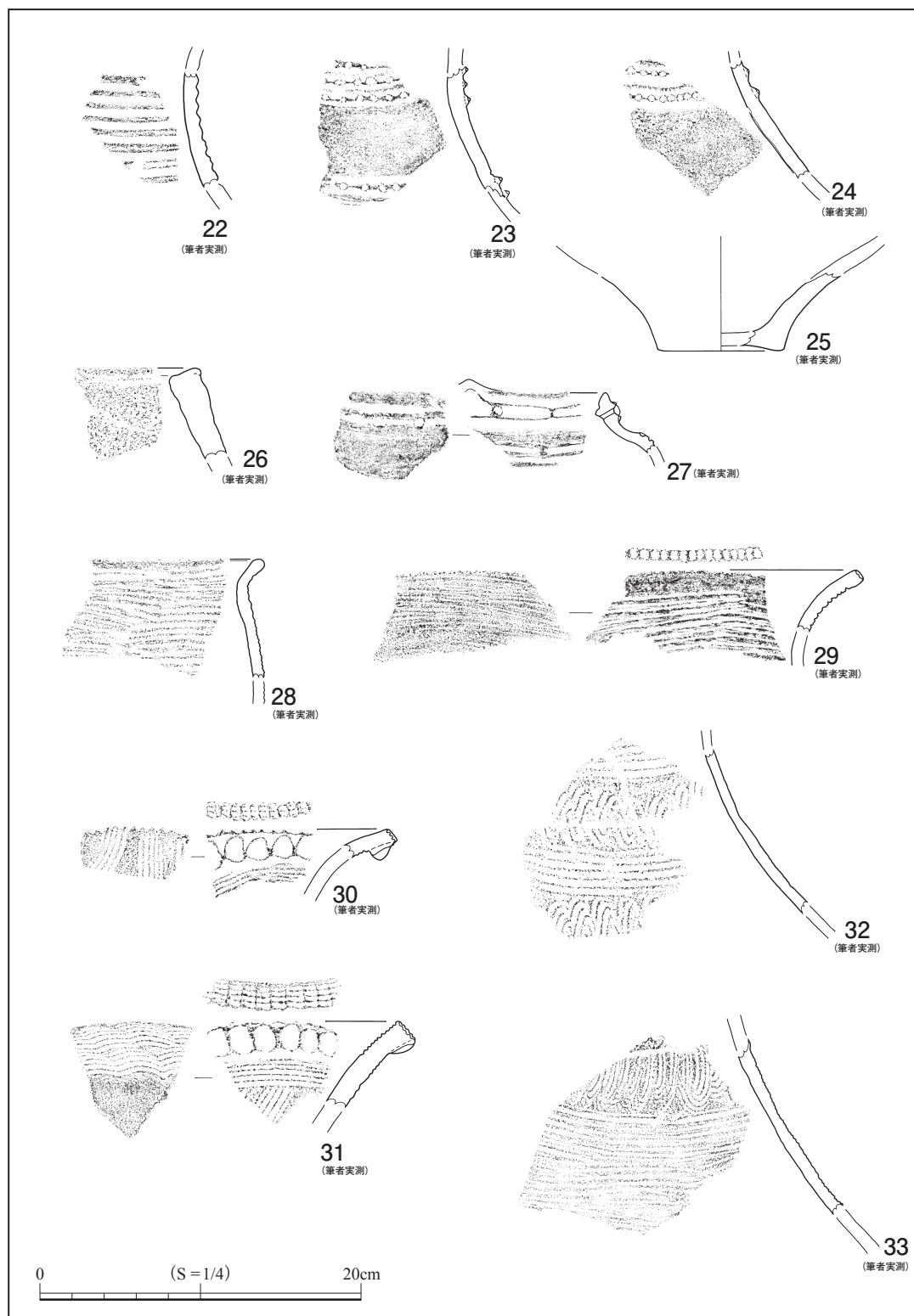
対象資料 本遺跡からは弥生時代後期初頭以降の土器群も少なからず出土しているが、紙数の制限もあるため、今回は弥生時代前期後葉から中期末にかけての資料紹介に留める。なお、記録では石庖丁等の石器も出土したとされるが、現在のところ、愛知大学総合郷土研究所では石器の保管は確認できていない。

2. 弥生時代前期後葉～前期末の遺物

この時期に相当する遺物には、**22～32**（第24図）がある。

22～25は遠賀川系土器である。**22**は壺形土器の頸部で、沈線を多条に施す。**23・24**も壺の頸部である。貼り付け突帯をめぐらし、そこに刻目状の押圧を加える。**25**は壺の底部であり、**24**と出土時の取り上げ番号が同じであることから、両者は同一個体となる可能性がある。

26は内傾口縁土器である。粗いナデ調整で、厚手に作った口縁の端部を、端面の中央が凹むほど強くなでて面取りを行なう。内傾口縁土器は、前期後葉の水神平様式に共伴することが知られており、この個体も同時期の所産とみなすことができる。



第 24 図 遺物実測図 (弥生時代前期後葉～前期末頃)

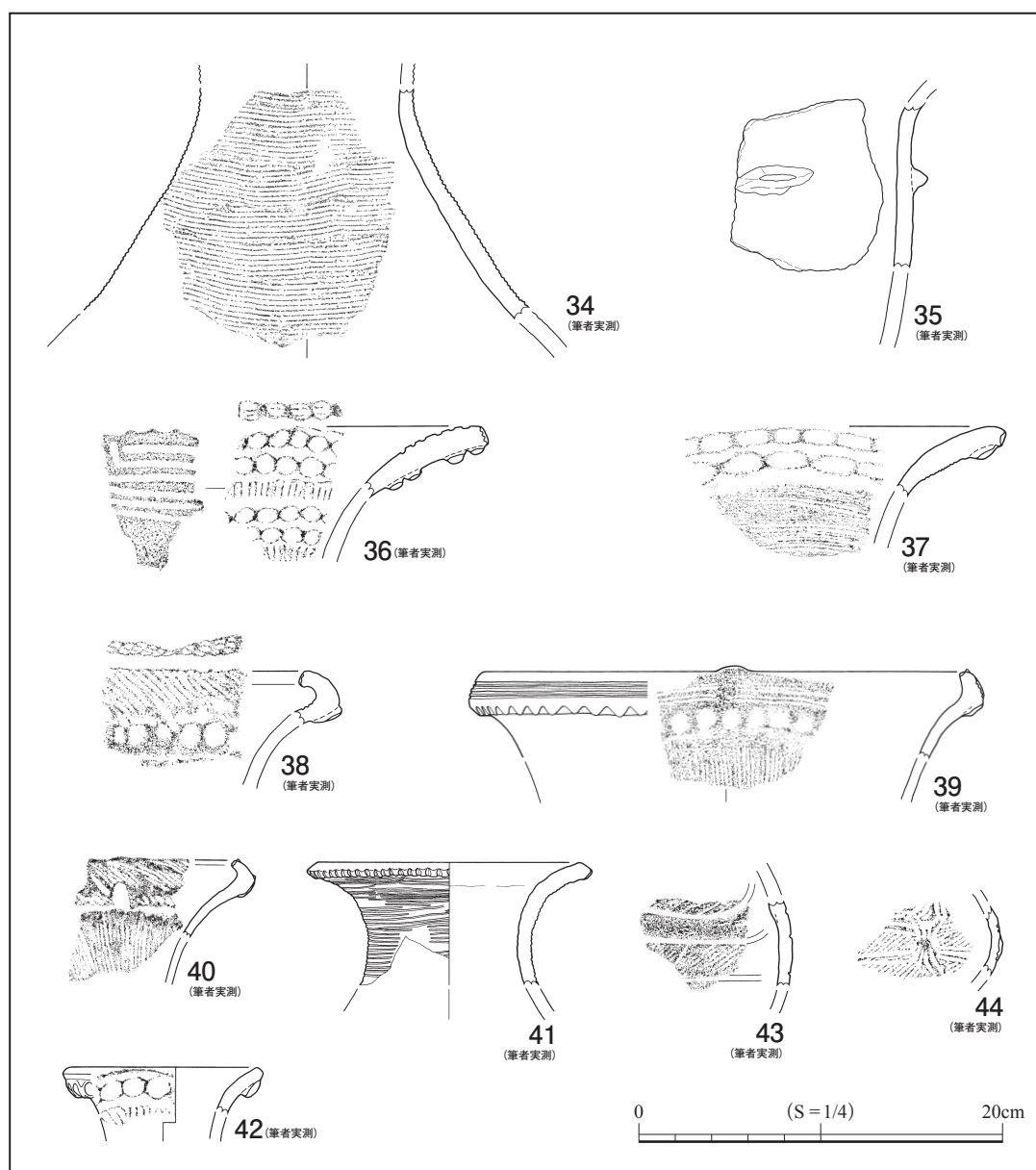
浮線文系の文様手法の27は、浮線渦巻文系土器の可能性のある壺（鉢）の口縁部の破片である。口縁部の一部がゆるやかに突起し山形状をなす。弥生時代前期併行期の所産と推定される。

28は条痕文系土器の甕である。まだ明確な羽状を呈さない、羽状の萌芽とみられる段階のものである。口縁部は短く外反し、端部を

かるく面取りしている。水神平様式初期段階の所産と考えられる。

29も口縁部が外反する条痕甕である。口縁端部に押引文を施し、内面はハケ調整で、外面には縦位羽状条痕が施される。水神平様式新段階の所産とみなすことができる。

30・31は大型の広口条痕壺である。口縁端部を押引文で加飾し、その直下に押圧突帯を



第 25 図 遺物実測図（弥生時代中期前葉）

めぐらせる。口縁内面にも施文がみられる。弥生時代前期末～中期初頭の所産と推定される。

32は、大型条痕壺の頸部である。文様帯は複帯構成をとり、横位直線文と波状文を交互に2段重ねて配す。弥生時代前期末～中期初頭の所産と捉えておきたい。

3. 弥生時代中期前葉の遺物

この時期に相当する遺物には、**33**～**51**（第24図～第26図）がある。

33は、条痕文系の大型壺の頸部である。横位直線文と跳ね上げ文が施され、複帯構成をとると推定される。**32**に似るが、跳ね上げ文を指標とすれば弥生時代中期に下る資料と捉えられる。

34は、尾張地方の朝日式の壺にみられる貝殻描の櫛描文を施す土器で、その器形から朝日式の影響を受けた条痕文系の壺形土器と推定される。器面には施文時に二枚貝腹縁を当てた弧状の静止痕が認められる（写真35）。

35は、瘤状突起を有する朝日式の大型鉢と推定され、搬入品の可能性がある。

36は大型の広口条痕壺である。大きく外反する口縁部の破片で、端部には押引文を施す。外面には縦位条痕が施され、2条一対の押圧突帯が2段に配される。内面には工字文風の多条の沈線が施される。

37も大型の広口条痕壺である。口縁端部および口端直下にめぐる突帯上に、指頭による楕円形の連続押圧を加える。

38は、受口状口縁の太頸条痕壺である。口縁内面を局部的に指押圧痕により凹ませ、口縁端部には押引きを施す。口縁外面は二枚貝による斜位条痕を施し、屈曲部直下には押圧突帯をめぐらす。**38**のような大型で受口の条痕文系壺の出土は東三河地域では少なく、目を引く個体である。

39・**40**も受口状口縁の太頸壺だが、口縁端

部はナデ調整、口縁外面は櫛による施文で仕上げる。口縁部に局部的に指頭によるツマミが施される。このツマミの位置に揃えるように、**39**の受口外面には貼付浮文⁽²⁾が、**40**の受口屈曲部には指押圧痕が施され、ツマミと組み合わせで加飾される。なお、**39**は受口屈曲部直下に押圧突帯を有するが、**40**はそれが退化し欠如する。

41は広口条痕壺である。口縁端部を面取りし、外面に押圧突帯を有さず、その代わりに口縁端部下端に刻み目をめぐらせる。頸部には横位の櫛描直線文を施す。

42は細頸壺の口縁部破片である。端部に面取りを施し、その直下に押圧突帯をめぐらせる。外面は二枚貝を用いたと推定される条痕が施される。瓜郷様式成立直前段階の所産と推定される。

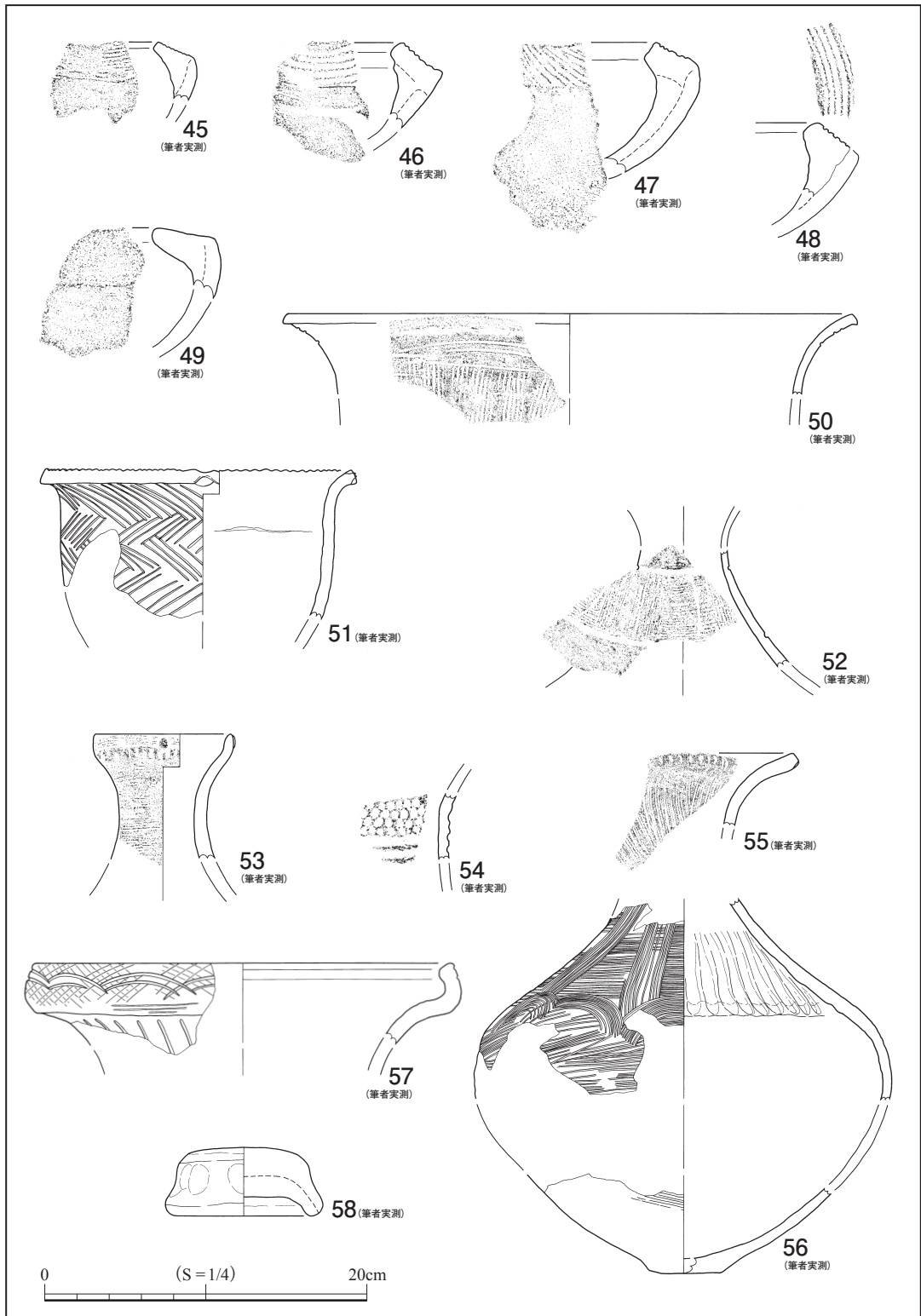
43は壺形土器の胴部であり、沈線による区画内を二枚貝背面圧痕もしくは櫛原体による擬縄文によって充填する。

44は、沈線文系の壺形土器の胴部片と推定される。2条一組の沈線による区画内を縄文で充填し、結節点には瘤状の隆起がみられる。

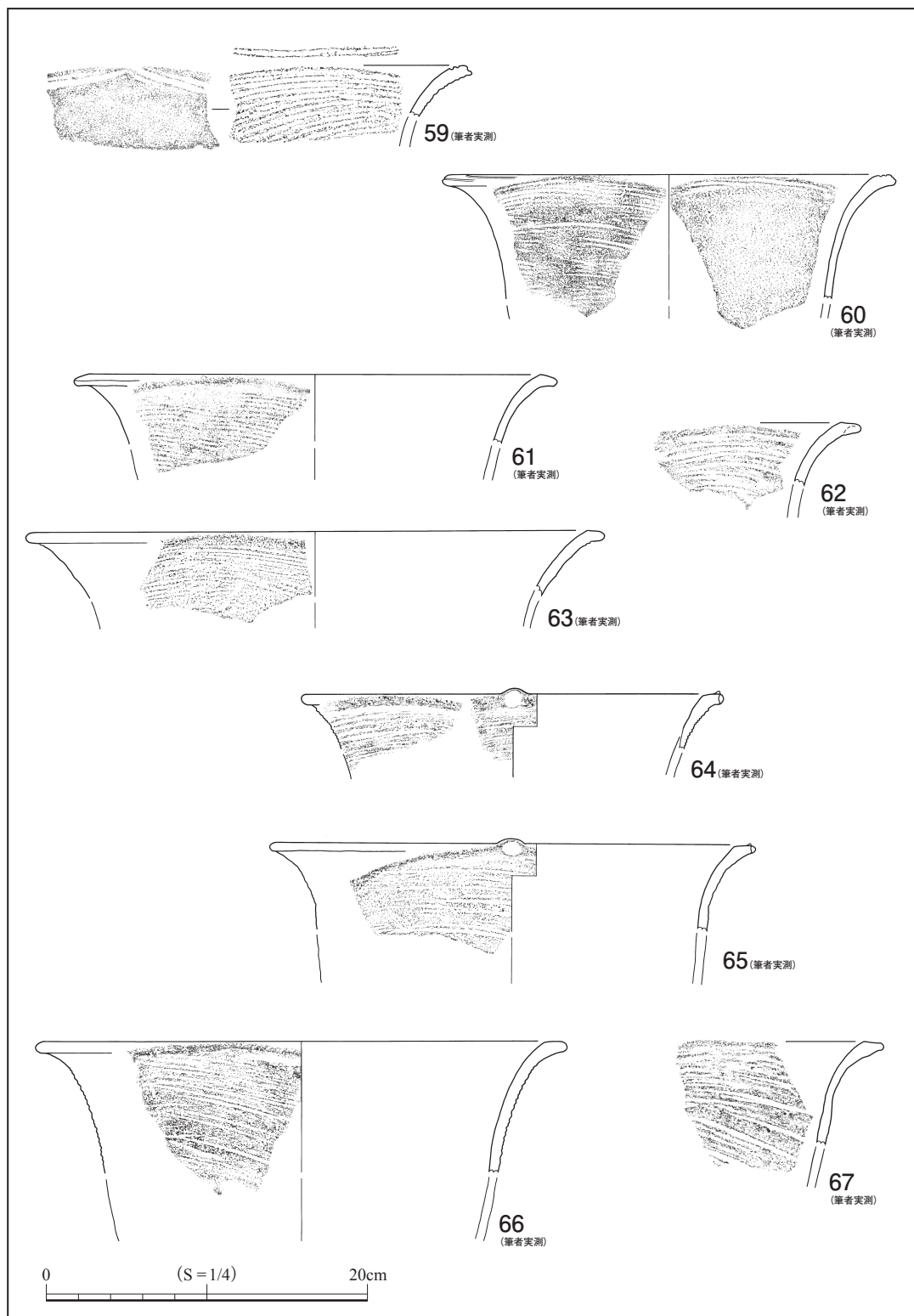
45～**49**はいわゆる厚口鉢である。いずれも小破片であり、口径を復元できる個体はない。これまで厚口鉢は「東三河地域に全く出土しない」⁽³⁾とされてきたが、50年前の1965年調査で出土していたことが今回確認された。**45**～**48**は口縁部に条痕を施し、**49**はナデ仕上げで終わっている。これら5個体⁽⁴⁾の厚口鉢は岩滑様式段階に位置付けられる。

50は条痕甕である。口縁端部に面取りを行なうものの、押引きなどの加飾は施さない。体部の外面調整は、口縁下で横方向、その下方では縦方向の条痕が施される。

51は櫛による横位羽状条痕を施す甕である。口縁端部に面を持ち、その上端に刻み目をめぐらせる。また、口縁部には、局部的に指頭による上下からのツマミを加える。



第 26 図 遺物実測図 (弥生時代中期前葉～中期中葉)



第 27 図 遺物実測図 (弥生時代中期中葉)

4. 弥生時代中期中葉の遺物

この時期に相当する遺物には、**52**～**67**（第26図・第27図）がある。

52は瓜郷様式の細頸壺の頸部で、付加沈線研磨技法が採用されている。沈線文で区画した文様帯を挟むように無文帯を上下に配す。

53は、口縁部が受口状を呈する櫛描文系の細頸壺である。口縁外面に円形浮文を貼り付け、受口屈曲部に刻み目をめぐらせる。頸部外面には櫛による横方向の直線文を施す。

54は、細頸壺の口縁部付近の破片である。外面を飾る刺突円文と太い沈線は特徴的で、阿島式土器や嶺田式土器との親縁性を想起させる。

刻み目を有す**55**は、細頸壺と推定される壺形土器の口縁部破片である。**56**と同じグリッド（C拡張区の1区）から出土しており、両者は同一個体だった可能性もある。

細頸壺（**56**）は、頸部の横位櫛描文を局所的に縦位櫛描文で区画しており、その下部に櫛描の連弧文を配す瓜郷様式の壺である。

57は受口状口縁の太頸壺である。口縁外面には斜格子の上に連弧文を描く。頸部にはヘラによる跳ね上げ文を施す。なお、**57**は、5号土器棺（7）と同じグリッド（C拡張区の1区）から出土している。両者は互いによく似た印象であることから、同一個体だった可能性もある。

58は脚台形の台盤状土製品で、脚部がわずかに形成される。

59～**67**は甕である。施文や形態の差から、口縁の端部や内面にも条痕を施す個体（**59**・**60**）と、口縁上面を屈曲させて面をなす（口縁内面に面取りを行なう）個体（**61**～**67**）の二者に大別される。両者ともに条痕調整を施し、**59**～**62**は二枚貝を、**64**～**67**は櫛を用いて仕上げている。**63**の原体は不明瞭である。また、**64**・**65**は口縁部に部分圧痕を加えている。

5. 弥生時代中期後葉～中期末の遺物

この時期に相当する遺物には、**68**～**83**（第28図・第29図）がある。

68は、口縁端部下端に刻み目をめぐらす細頸壺である。櫛描文の特徴から、中期中葉に遡る可能性もある。

69は太頸壺で、口縁上面を強く屈曲させ、口端面に櫛原体による押引文を施す。

70は細頸壺で、頸部から肩部にかけて、横位の櫛描文帯を縦位の櫛描文で区切るように描いている。

71は細頸壺の頸部で、櫛による縦方向や横方向の直線文で構成され、そこに円形の貼付浮文で加飾する。この円形浮文は2段にわたって5単位でめぐる。

これら**69**～**71**は、その特徴から、中期後葉でも古い段階の所産と捉えておきたい。

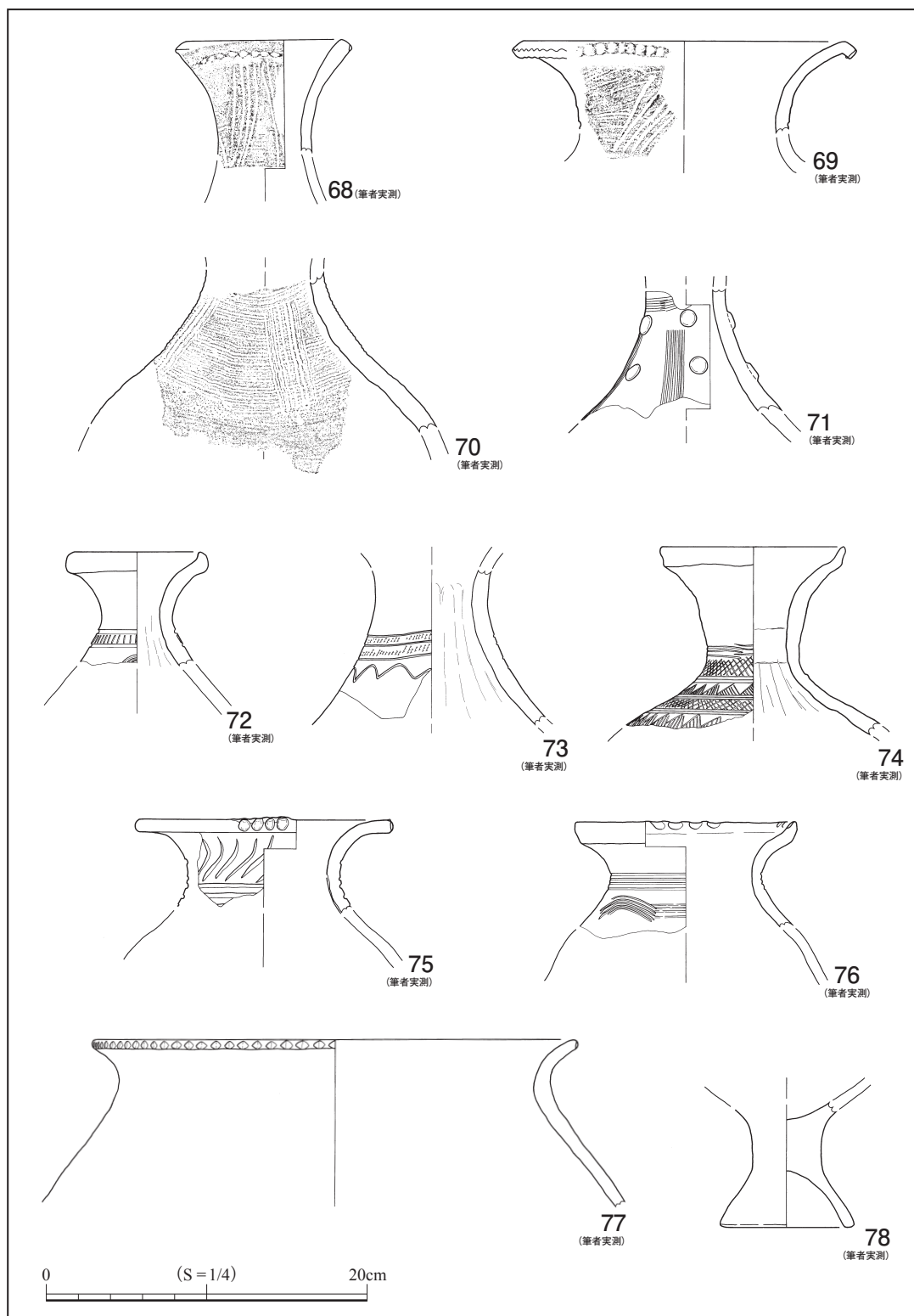
72は、口縁部をやや屈曲させて、わずかに受口状を呈する細頸壺である。頸部を2条の太い沈線で区画し、その間に縦位の短線を充填する。その下位に波状文もしくは連弧文を配す。中期後葉の古井様式段階の所産と考えられる。

73は細頸壺の頸部である。沈線によって区画された文様帯に貝もしくは櫛による刺突を充填する。その下位には波状文を描く。形態や施文から、古井様式段階の所産と思われる。

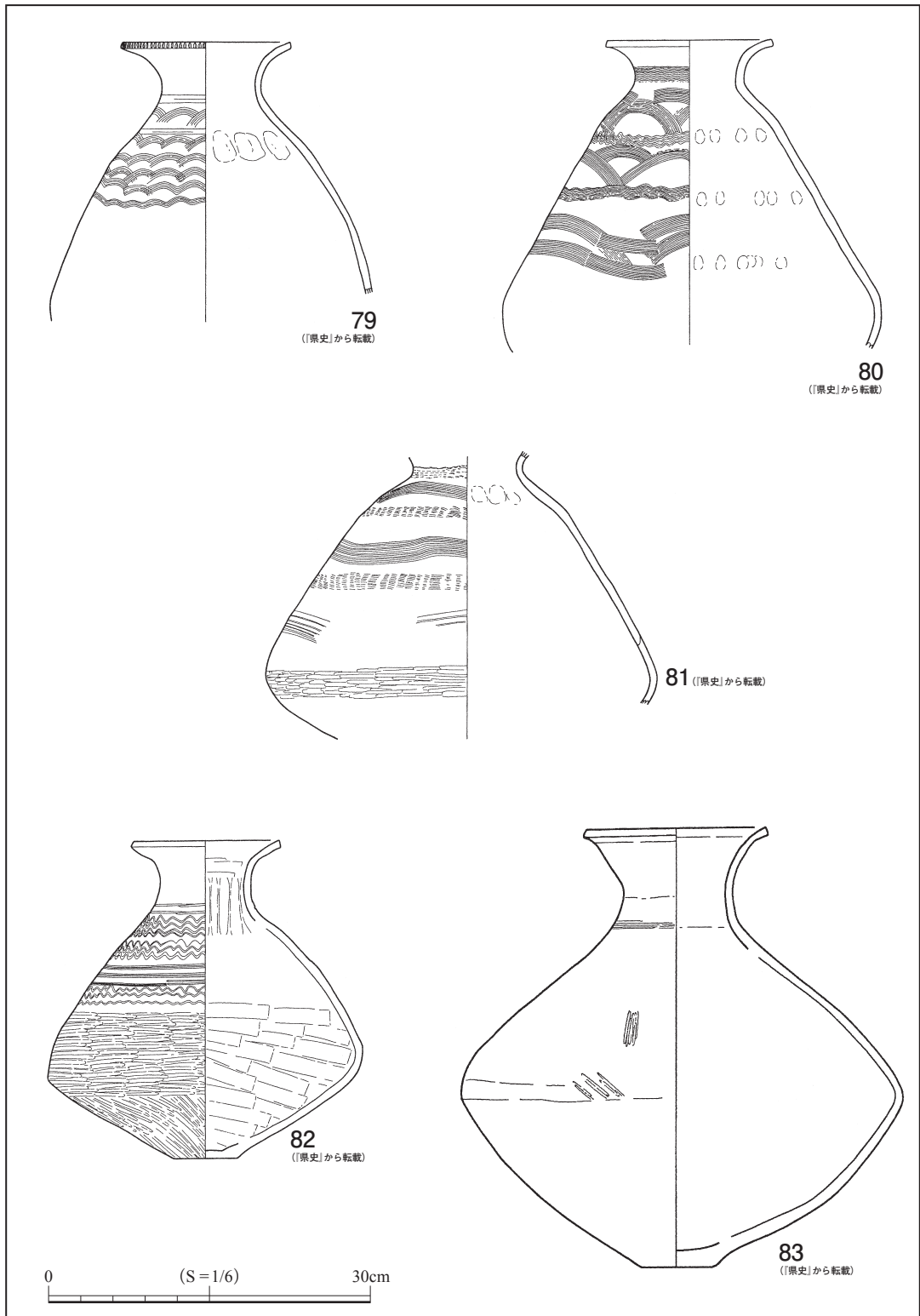
74は、**72**同様、口縁部が受口状を呈する細頸壺である。頸部から肩部にかけて、櫛描直線文と斜格子文・鋸歯文が交互に配される。その文様構成から、中期末の長床様式段階に下ると推定される。

75は広口壺である。口縁端部に4個1単位の部分圧痕がみられる。古井様式段階の所産と推定される。

76も広口壺である。口縁部をわずかに屈曲させて受口状を呈するが、その受口は退化し、痕跡程度となる。口縁内面には4個1単位の部分圧痕を4か所に配す。頸部に櫛描直線文、



第 28 図 遺物実測図 (弥生時代中期後葉～中期末)



第 29 図 遺物実測図 (弥生時代中期後葉～中期末)

肩部にも直線文と連弧文を施す。古井様式段階の所産と考えられる。

77は、無文のナデ調整の甕である。口縁部を緩やかに屈曲させ、端部を丸く仕上げて、刻み目をめぐらす。中期末の長床様式段階の在地系の台付甕である。

78は台付甕の脚台部である。中実の柱状をなすタイプで、裾部が内彎して広がる。

79～83は、すでに『愛知県史 資料編2 考古2 弥生』（愛知県2003）⁽⁵⁾で実測図が公表されているものである。

79～81は体部下半が張って下膨れの形をなす古井様式段階の壺である。いずれも在地系の土器である。79は、体部上半に短い単位で横方向に繋いだ連弧文を多段にめぐらせ、それとほぼ同じ波長の波状文を最下段に一巡させる。口縁端部には刻み目をめぐらせる。80は、肩部の張る形態を呈する。外面には波状文と連弧文を交互にめぐらせる。連弧文の描法には2種類が認められる。連弧の谷間を埋めるような弧文を加える図柄と、ゆるやかな波状を呈するかのよう連弧の間を繋ぐ弧線を付加する図柄である。実測図には表れていないが、口縁端部には刻み目を施した痕跡が認められる。81は、体部上半にゆるやかに蛇行する櫛描きの波状文と、短い単位で施される横線文を交互に重ねて配す。

82・83は体部中央部が張る、いわゆるソロバン玉形を呈する凹線文系土器の影響を受けた長床様式段階の壺である。82は体部上半を櫛描横線文と波状文で飾る。83は磨滅して不明瞭ながらも、頸部には櫛描横線文がみられる。

6. 結びにかえて

小括 本稿では、前二稿で紹介し得なかった河原田遺跡の土器棺以外の出土遺物のうち、弥生時代前期～中期の土器の主要な資料について報告を行ってきた。

その結果明らかになった主な事柄は次の点である。①条痕文系土器に伴い遠賀川系の壺(22～25)が確認されること。②浮線渦卷文系土器の可能性のある壺(27)が認められ、三河地域では数少ない出土事例として目を引くこと。③朝日式の貝殻描の櫛描文の手法を取り入れた壺(34)が確認されること。④瘤状突起を有する外来系の大型鉢(35)が確認されること。⑤沈線文系の可能性のある壺(44)が認められ、三河地域では希少な出土事例として目を引くこと。⑥これまで東三河地域で出土が確認されていなかった厚口鉢(45～49)の存在が明らかとなったこと。これらのことから、尾張・西三河地域との交流を示す本遺跡の出土遺物は、当地域の初期弥生文化の成立を考える上で、大いに活用されるべき内容を備えていることが、従前以上に示されたといえよう。

今後は、まだ資料化できていない弥生時代後期以降の遺物についても図化作業を進め、さらに資料紹介を重ねていきたい。

謝辞 本稿をまとめるにあたり、筆者が何か問題に直面すると、いつも快く相談に乗ってくださり、親身になって御指導いただいた前田清彦氏に心からの感謝を捧げたい。

資料の実測・採拓に際しては、玉井力先生・森田亮子さんの援助を受けた。多謝。

また、朝倉留美・井口喜晴・神谷智・鈴木とよ江・廣瀬憲雄・山田邦明・愛知県史編さん室の各氏・機関からも御教示と御助力を賜った。記して謝意を表したい。

註

(1) 栢原将人(2013)「河原田遺跡発掘調査の記録Ⅰ」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第58輯』愛知大学

栢原将人(2014)「河原田遺跡発掘調査の記録Ⅱ」『愛知大学総合郷土研究所紀要 第59輯』愛知大学

(2) 円形浮文のようにも見えるが、これは棒状浮文が押し潰れて生じた形状と考えられる。

- (3) 永井宏幸 (2003) 「内傾口縁土器と厚口鉢」『まいぶん愛知』 p.3

永井宏幸 (2004) 「内傾口縁土器から厚口鉢へ～伊勢湾沿岸域から持ち運ばれた容器～」『考古学フォーラム 16』 p.49

- (4) この他にも、さらに1点の厚口鉢を確認している。図示した5個体 (45～49) よりも破損が著しい小破片で、48によく似た個体である。これを加えると、河原田遺跡から出土した厚口鉢は全部で6点となる。

- (5) 加藤安信 (2003) 「河原田遺跡」愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編2 考古2 弥生』 pp.606-607

なお、『県史』p.607に掲載された実測図の縮尺には誤謬があつて注意を要する。このため、本稿では縮尺を是正して転載している。

参考文献

前田清彦・鈴木とよ江 (2002) 「三河地域」加納俊介・石黒立人編『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社

石黒立人・宮腰健司 (2007) 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会

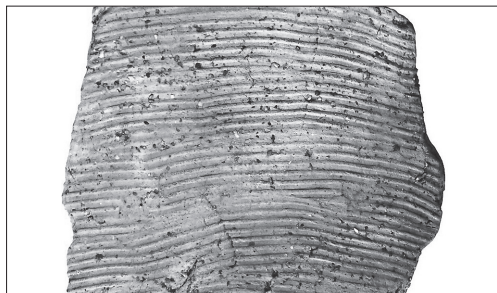


写真 35 二枚貝の弧状の静止痕



写真 36 ミーティングの様子



写真 37 重要資料精選作業



写真 38 前田清彦氏を招聘しての資料調査